

石川・高岡町遺跡

たかおかまち

所在地	石川県金沢市高岡町
調査期間	第三次調査 一九九九年（平11）六月～九月
発掘機関	金沢市教育委員会
調査担当者	出越茂和・増山 仁・谷口明伸
遺跡の種類	集落・武家屋敷跡
遺跡の年代	古墳時代、奈良・平安時代、江戸時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	本遺跡の調査は、都市計画道路（橋場・若宮線）の建設に伴うものであり、一九九七年より三カ年にわたって実施した。遺跡周辺は現在金沢市の中心街に位置し、藩政期には武家屋敷地が展開した。調査地は前田家家臣中川氏（禄高五千石）の屋敷地にあたることが、町絵図などの文献史料より判明している。
8 木簡の釈文・内容	<p>(1) 「く大平源右」</p> <p>(2) 「く□いた□□□」 [めか]</p> <p>(3) □ [丸カ]</p> <p>173×21×3 061 最大径90×高65 061 (88)×29×4 081</p>

遺構と遺物が確認されている。古墳時代、奈良・平安時代の遺構・遺物は比較的まとまった量が出土しており、中・近世以前の金沢市街地の様相を知る上で、貴重な資料となっている。特に一九九九年の第三次調査では、国内でも類例の少ない半瓦当の他、銅製帶金具・円面硯・奈良二彩など、有力氏族の居住を想定させるような遺物が出土した。

近世段階では、ゴミ穴や礎石建物などの遺構が確認された。今回報告する木簡はいずれも、近世のゴミ穴SKO九（出土遺物より一七八世紀の遺構と思われる）より出土した。SKO九は調査区の西端に位置するため全体の形状は不明であるが、近世の遺構面よりの深さ約一mという大規模な遺構である。覆土は砂質土と有機物を含む層が交互に堆積し、木簡はいずれも有機物を含む層より出土した。

(1) 「く大平源右」

(2) 「く□いた□□□」 [めか]

(3) □ [丸カ]

(1)は上部の左右それぞれ二箇所に切り込みを入れ、宝塔状に加工するが、あるいは人頭状に加工したものかもしれない。上部右側の



半円状の部分は側面からのケズリによつて丁寧に加工されている。下部は側面からのケズリにより尖らせるが、端部は切り落とされている。表裏面ともケズリが施されており、丁寧に仕上げられている。両面に墨書きが認められ、片面には「大平源右」二という人物の名が、その裏面にはかな文字が書かれている。大平源右_二なる人物は文献史料では確認できなかつたが、調査地が中川家の屋敷地であることから、中川氏の家臣団の一員である可能性もある。その形状から何らかの祭祀的な用途が想定されよう。

(2)は曲物の側面、縦目のほぼ反対側に「志ろさとう」(白砂糖)と墨書きするもので、贈答用白砂糖の容器と思われる。底板が現存し、底板及び側板の一部分に焦げ目がある。金沢市内での贈答用白砂糖容器の出土例としては、他に安江町遺跡から出土した「進上／白砂糖／一曲」の墨書きがある(金沢市教育委員会「安江町遺跡」「一九九七年」、本誌未収)。

(3)は長方形の材の片面に墨書きがある。訛文は確定し難いが、「丸」または「九」の可能性がある。材は上下端とも欠損しており、特に上端は切り込みを入れた後に折り取られている。文字は一字で完結するようであり、墨書き面には明瞭なケズリの痕跡が確認できる。用途は不明。

(谷口明伸)